

## マイクロロングを用いたヤマアジサイの小鉢生産

福岡県八女地域農業改良普及センター

野菜花き課 花き係長 **松 野 孝 敏**

(前 福岡県農業総合試験場花き部)

### 1. はじめに

シクラメンの組み合わせ品目として生産される機会の多い鉢物アジサイの主な品種は、西洋アジサイと呼ばれる品種群に属し、日本原産のアジサイを中心に育成されたものである(鶴島, 1972; 上町ら, 2002)。近年、福岡県では鉢物需要の多様化に対応して、西洋アジサイにない可憐な草姿の魅力をもつヤマアジサイの商品化に取り組む生産者が増加している。

ヤマアジサイは日本原産の落葉低木で、北海道から九州まで広く分布している。アジサイが沿海地の林下や林縁などに自生するのに対して、ヤマアジサイは山間の谷間や林床に広く自生し、別名サワアジサイともよばれている(大場, 1989)。

ヤマアジサイの花芽は10月下旬から11月にかけて新梢の頂部および腋芽に形成され、11月中下旬に雄ずいおよび雌ずいを形成し、自発休眠に入

る(松野ら, 2008)。

アジサイの鉢物生産では、出荷前年の春に挿し木して育苗する。育苗では花芽数を確保することが重要である。さらに、小鉢生産ではコンパクトな苗を生産することもあわせて重要である。今回、マイクロロングを用いたヤマアジサイの小鉢生産技術について検討したので報告する。

### 2. 試験の概要

試験は福岡県農業総合試験場花き部(福岡県筑紫野市)において2004~2006年にかけて実施した。

各試験とも供試品種に‘クレナイ’を用い、鉢上げ後のかん水はすべて樋式底面給水方法により常時給水した。鉢上げ用土は、調整ピート30%+粉碎杉皮30%+腐葉土10%+パーライト10%+赤玉土20%(容積比)を混合したものをを用いた。

## 本 号 の 内 容

§ マイクロロングを用いたヤマアジサイの小鉢生産 .....	1
福岡県八女地域農業改良普及センター 野菜花き課 花き係長 <b>松 野 孝 敏</b> (前 福岡県農業総合試験場花き部)	
§ 熊本県水俣・芦北地域における サラダたまねぎ「サラたまちゃん」の取り組み .....	5
熊本県あしきた農業協同組合 サラたまちゃん部会 部 会 長 <b>田 畑 和 雄</b>	
§ 花壇苗生産における肥効調節型肥料の利用 .....	10
大阪府環境農林水産総合研究所 主任研究員 <b>内 山 知 二</b>	
§ 2008年本誌既刊総目次 .....	13

## 3. 育苗期の施肥量と施肥時期

## (1) 試験方法

マイクロロングトータル201-100タイプ (N-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>O=12-10-11) を用い、施肥量は1鉢当たり2gと4g (ただし、6月30日処理は4gのみ) の2水準、施肥時期は鉢上げ2週間後 (6月30日)、同6週間後 (7月28日) および同10週間後 (8月25日) の3水準の組み合わせ処理とした。試験規模は1区20鉢とした。育苗は、調整ピートを入れた6cm黒ポリポットに1節に調整した挿し穂を用い、鉢当たり3本を2004年5月21日に挿し木した。鉢上げ容器は11.2cm径底面給水鉢 (容積: 500ml) を用い、2004年6月18日に鉢上げした。試験はシルバーダイオネット被覆下のパイプビニルハウスで行った。

## (2) 結果および考察

試験の結果を表1、写真1に示した。施肥量4g/鉢では、8月25日処理で1次側枝数が8.7本となり少なかった。1次側枝長は、7月28日以降の処理で18.4cmとなり、6月30日処理の27.2cmよりも短くなった。2次側枝数は、6月30日処理が4.2本となり、施肥時期が遅くなるほど少なくなる傾向が見られたが、6月30日と7月28日処理に有意な差は見られなかった。6月30日処理は過繁茂となり、小鉢生産には使えない苗となった。花房数は処理区間に差が見られなかった。

施肥量2g/鉢では、7月28日処理と8月25日処理で1次側枝数に差は見られなかった。1次側枝長は処理時期が遅いほど短くなり、2次側枝数は少なくなった。開花数は7月28日処理が19.9

表1. 施肥方法がヤマアジサイ ‘クレナイ’ 苗の生育と開花数に及ぼす影響

施肥量 <sup>1)</sup>	施肥時期	1次側枝節数	1次側枝長 cm	2次側枝数	花房数
4 g	6月30日	10.5 bc <sup>2)</sup>	27.2 a	4.2 a	14.8 b
	7月28日	11.8 ab	18.4 bc	1.8 abc	15.3 ab
	8月25日	8.7 cd	17.3 c	1.2 bc	14.4 b
2 g	7月28日	8.2 d	22.2 b	4.0 b	19.9 a
	8月25日	7.7 d	15.2 c	0.6 c	4.6 c

注) 1. 肥料名 マイクロロングトータル201-100タイプ (N-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>O=12-10-11)

2. 調査項目ごとに、異なるアルファベットは、Tukeyの多重検定5%水準で有意差あり

## 写真1. ヤマアジサイ ‘クレナイ’ における施肥量と施肥時期が苗の生育に及ぼす影響

2004年11月2日撮影

施肥時期(月/日) 6/30

7/28

8/25

施肥量 4g/鉢

4g/鉢

2g/鉢

4g/鉢

2g/鉢



個で8月25日の4.6個より多く、4g/鉢区と同等であった。

以上の結果から、ヤマアジサイ‘クレナイ’の小鉢生産のための育苗にマイクロロングトータル201-100タイプを用いる場合には、7月下旬に鉢当たり2~4gが適すると考えられた。また、より小型の苗を生産する目的で施肥時期を8月下旬とする場合には、鉢当たり4gが適すると考えられた。

#### 4. 小鉢生産における施肥量

##### (1) 試験方法

試験区は、ペレット状肥料Bの1鉢当たり2g (N-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>O=10-10-10 2g/粒)、

ペレット状肥料Pの1鉢当たり1.5g (N-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>O=12-12-12 1.5g/粒)、マイクロロングトータル201-100タイプの1鉢当たり2g、4gおよび6g/鉢 (N-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>O=12-10-11)、無処理の6区を設けた。施肥は2006年3月2日に行い、試験規模は1区10鉢とした。育苗は2005年6月9日に128穴のセル成型トレイを用いて挿し木した苗を、7月19日に9cm径黒ポリポットに鉢上げし、8月25日にダミノジット4,000ppmを散布した。定植は2006年2月1日に12cm径底面給水鉢を用いて行い、栽培温度は夜間最低気温13℃とし、25℃で天窓により自動換気した。試験は硬質板ハウスで行った。

表2. 施肥方法がヤマアジサイ‘クレナイ’の生育と開花に及ぼす影響

肥料名	施肥量	草丈	株径	花房数	SPAD値	開花日	開花に要した日数 <sup>1)</sup>
ペレット状肥料B <sup>2)</sup>	2 g	cm 25.5 a <sup>5)</sup>	cm 29.9 b	5.4 ab	28.8 c	5/4 <sup>月/日</sup>	75.5 a
ペレット状肥料P <sup>3)</sup>	1.5	26.0 a	31.2 b	7.6 a	30.1 c	5/3	73.6 a
マイクロロングT <sup>4)</sup>	2	25.5 a	31.5 b	6.5 ab	36.2 b	5/1	73.7 a
マイクロロングT	4	25.4 a	34.0 ab	6.3 ab	43.8 a	5/3	75.2 a
マイクロロングT	6	28.0 a	36.7 a	7.0 ab	43.2 a	4/30	73.8 a
無処理	*	24.2 a	23.9 c	4.6 b	21.2 d	5/4	75.6 a

注) 1. 加温開始から装飾花の開花までに要した日数

2. ペレット状肥料B 1粒/鉢 (N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=10:10:10 2g/粒)

3. ペレット状肥料P 1粒/鉢 (N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=12:12:12 1.5g/粒)

4. マイクロロングトータル201-100タイプ (N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=12:10:11)

5. 調査項目ごとに、異なるアルファベット間にTukeyの多重検定5%水準で有意差あり

写真2. 施肥方法がヤマアジサイ‘クレナイ’の生育に及ぼす影響

左より 無処理, マイクロロングトータル201-100タイプ 2006年5月8日撮影

(N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=12:10:11) 642g/鉢, ペレット状肥料P 1.5g/鉢

(N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=12:12:12) ペレット状肥料B 2g/鉢

(N:P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:K<sub>2</sub>O=10:10:10)



## (2) 結果および考察

試験結果を表2, 写真2に示した。草丈は無処理が24.2cmとやや低くなったが, 施肥方法による差は見られなかった。株径はマイクロロングトータル6g/鉢が36.7cmで最も大きく, ペレット状肥料B, ペレット状肥料P, マイクロロングトータル2g/鉢, 4g/鉢に有意な差は見られなかった。無処理区の花房数は4.6個, 葉身長は7.2cm, 葉身幅は4.1cmで最も小さくなったが, 施肥を行った区間に差は見られなかった。SPAD値(葉色)はマイクロロングトータル4g/鉢, 6g/鉢がそれぞれ43.8, 43.2となり最も大きく, ペレット状肥料Bは28.8, ペレット状肥料Pは30.1となり, 葉色が薄くなった。開花日, 開花までに要した日数に差は見られなかった。

以上の結果から, ヤマアジサイ‘クレナイ’の5月上旬出し栽培では, マイクロロングトータル201-100タイプを定植約1ヵ月後に4号鉢当り4~6g施肥することによって, 葉色の濃い高品質の鉢物を生産できることが明らかになった。

## 5. 普及上の留意点

試験に用いた‘クレナイ’は, 比較的丈夫で草姿も良くまとまり鉢物化しやすい品種である。ヤマアジサイの品種によっては, 草姿がまとまりにくく, 花芽がつきにくいなど鉢物化する上で問題のある品種も存在する。品種選定に当たってはこれらの特性を踏まえることが重要である。

ヤマアジサイは前述のとおり, 樹陰に自生する低木であり, 夏の強光や乾燥に極めて弱い。夏季の育苗に当たっては適度に遮光し, 底面給水栽培とするなどして水切れしないように注意することが重要である。しかし, 品種によっては, 遮光が強すぎると着花数が減少するものもあるため, 品種の特性にあった管理が必要である。また, 仕上げ鉢のサイズによって苗の大きさを変える必要があるため, 育苗に当たっては栽培日程や施肥量を調整し, コンパクトで充実した苗を作ることが大切である。また, 育苗時にわい化剤を使用して苗の徒長を防止するとともに花房数を確保することも必要である。促成栽培では, 加温開始時点で苗の低温要求量が満たされている必要がある。筆者

らの試験では, 福岡県において西洋アジサイ品種は年内の低温で十分であるのに対して, ヤマアジサイでは1月下旬まで無加温のハウス内に置かないと低温量が不足することが明らかになっている。そのため, ヤマアジサイの促成栽培では, 1月下旬まで無加温ハウス内で十分低温に遭遇させた後に加温を開始することが重要である。

## 6. おわりに

多くの花の消費は品目, 品種および商品化形態が多様化することによって拡大してきた。これまで, 鉢物アジサイの需要は豪華な西洋アジサイを大鉢に仕立てることで, 「母の日」を中心に拡大してきた。しかし, 大鉢のみの生産では, 狭隘な住宅条件の下では置き場の確保が難しく, 消費の妨げとなっている。ヤマアジサイがコンパクトで可憐な鉢物として活用されることが望まれる。一方, ヤマアジサイのほとんどの品種は, 自生地における変異を見出して品種化したものである。そのため, 生産性に劣る品種が多い。とくに, 夏の暑さに弱い特性は生産上問題となっている。これらの課題を解決するために, 福岡県ではヤマアジサイの可憐さと西洋アジサイの丈夫さを兼ね備えた, 小輪多花性の新しいタイプのアジサイを開発中であり, すでに4品種を発表した。今後, より多様な品種が開発され, 鉢物農家の経営安定に寄与することが望まれる。

## 引用文献

- 大場秀章. 1989. 日本の野生植物 木本1. p. 166-172. 平凡社. 東京
- 鶴島久男. 1972. 鉢花のプログラム生産2. 主要鉢花の栽培技術. p. 102-105. 誠文堂新光社. 東京.
- 上町達也・新庄康代・北風有理・西尾敏彦. 2002. RAPD分析による *Hydrangea macrophylla* および *H. serrata* の系統分類. 園学要旨. 71(別1): 341.
- 松野孝敏・國武利浩・谷川孝弘・巢山拓郎・山田明日香・2008. ヤマアジサイにおける着花特性に基づく栽培管理方法の確立. 園芸学研究. 7(2): 189-195.